

(同称十念)

本日は私共に生死流転があるべき道理ということについて、お話しさせていただきとうございます。こちらにまいりまして新聞を読みましたが、昨日は広島原爆投下のちようど五十周年の集いがあつたということで、灯籠流しが朝日新聞の一面に色刷りで出ておりました。今回はそういうふうな生死流転とか因果応報とかそういうお話をさせていただきますたいと思います。

中国に善導大師という尊いお方がお出ましになりました。善導大師のような三身四智の仏眼を開かれた尊いお方というのは、光明主義の上から申しますと、日本では法然上人とか徳本上人とか弁栄聖者とかが、こういうような方々にお比べするといふお方でございます。しかしそういうことは、私共の肉の感覚の眼まなことか肉の心に依存した理知・理性では、少しも分からないのでございます。弁栄聖者が仰言つた処に従つてそうなんです。その善導大師は「忙まじ々たる六道、定趣じやうしゆなし」と言つていらつしやいます。

現在私共は人間界にいるわけでありますが、こういう相対界・自然界と申しますのは、これを仏教では六道と大まかに六通りに分けるんでございます。そしてそこに生を受けて、

いろいろな姿・形をとりまして、それ相応の寿命があつてやがて死ぬということが、自然界においては決まりきつたことなのでございます。けれど死んでどうなるかと申しますと、一定の趣くべき世界が私共に決まつている訳ではない。人間惣々そうそうとしていろいろな仕事をし、「年命の日夜に去ることを覚らず。忙々たる六道、定趣なし」、即ち自分の作つた行為、いわゆる業によつて導かれ趣く世界がそれぞれ違ふと言われているのでございます。それで弁榮聖者が、現代語でこの生死世界を自然界とおっしゃつたわけであります。自然界は私共が持つている肉眼と、世間の三昧の眼である天眼と、こういうものを以て自然界を見ることができるのであります。私共には地獄も餓鬼も、修羅の天狗の世界も見えませんが、まして況いわんや、天上界の神々の世界を見ることはできません。

そこで昔から大哲學者の中には、私共こうして世界を見ているのだけれどこれで私共が世界を全部見ているのか、と問題提起した方があります。そして私共は世界全体を見えないのだ、と優れた哲學者は言っているのでございます。自然界を全部見えないということになる訳でございます。だから仏教では自然界を大きく六通りに分け、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と六通りに分けるのでございます。

これは弁榮聖者が仰言つたお話であります。三河の国に或るお寺がありました。お子さんが多く、もしぼっくり自分が死んでしまったなら妻子が路頭に迷うであろうと住職が心配しまして、お金を作っておいてやりたいと思ひました。別にお金を貯めるといふことがいけないというのではありませんが、そのお金の儲け方が非常に悪かつた。人の道はずれた悪辣なやり方をしました。ところがその住職は病氣になつて命短く死にました。それで弟弟子があとの住職になりました。

死んだ住職は無間地獄に墮ちました。「わしは無間地獄に墮ちている。こうした冷たさに毎日苦しんでいる」とあとの住職に食らい付きました。それは身を裂かれるばかりの寒さでした。「私の冥福を祈ってくれ」といつてどこかへ行つてしまいました。寒さだけが残りました。寒塗かんづに墮ちたのですね。

三回忌の時であります。先の住職が又やつて来て「大いに苦痛が安らいだ。今一息のところであるからよくお念仏して回向してくれ」と頼みました。それで今の住職は一週間不眠で別時をしました。ところがお寺のことですからよんどころない用事で檀家に行くことになりました。その外出する時、「私の留守中入つて下さるな」と言つて出て行きました。

大体人間というものは、絶対入ってはいかんと言われると、よけいしてみたくなるものでございますね。そこでお母さんは、「覗き込んだじやいかんと言うが一体何があるんであろう」と思つて、留守中に襖を開けて覗き込みました。すると死んだはずの前の住職の後ろ姿が見えました。それで今の住職はその話を聞いて、「袈裟衣をつけてお内仏の前で拜んでいるのであれば、寒塗の苦しみも安らいだのであろう」と安心致しました。

礼拝儀四頁の三行目に「もし三塗勤苦の處にありて此の光明を見たてまつらば」とあります。三塗というのは、地獄・餓鬼・畜生、こういう地獄道・餓鬼道・畜生道を三悪道と言います。それとまた「塗」又は「途」というのは道とか塗炭の意味ですが、地獄のことを猛火で焼かるる世界というので火塗という。それから餓鬼の世界のことを刀で身体を切りさいなまれるような苦しみというので刀塗という。また畜生道を互いに食い合う世界というので血塗と、こういうふうに申します。

大東亜戦争が苛烈になつてきまして、学徒動員も始まり、また戦争に行かない者を炭坑に徴用するという事も始まりました。私その当時京都におつたんですが、「京都仏教会から何名出せ」という命令がきました。炭坑はその岩盤を支える木材が南方から初めはど

んどん送られて来たけれど、戦争も終わり頃になると敵の潜水艦も出沒し、思うにまかさず落警が頻繁におこる、ものすごく危険だと世間で言われておりました。私、その当時戦争に行かずにおったのですが、そういう者はいつぺんに目をつけられるんでございます。それでお檀家の方がどこかに勤めたらと言われる。その当時京都の高雄にいましたが、高雄学区が高雄の学校の会計を管理していました。そういう制度が当時京都にありました。そこで土地の学校に勤めたならば、徴用を免れることができると言われて、昭和十八年から十九年から二十三年まで勤めていた訳でございます。戦後は新制中学が出来てその教頭になりました。

戦時中、学校の生徒を連れて遠足に行かなくてはなりません。ずっと行列を作って行きますね。するとよその学校の生徒さんも先生に連れられてやって来ます。すれちがいます。すると犬と犬が会うように、後ろの方にいる腕白大将がお互いずっと近づいていつて先ず殴り合いを始めます。そのまま放っておくとケガをします。血塗というが実にうまく言ったものだなあと思った訳です。

火塗・刀塗・血塗というのは自然界の監獄みたいなものである。人間の監獄ではなくて、

自然界の監獄であつて、私共は生きてゐる間から地獄・餓鬼・畜生のそういう罪を作ればそこに行かざるを得ない。私共には、対象に向かつて心を発動さす心的作用があります。それを仏教では「思」という。現在の言葉で意志と言つとよいでしょう。大乘では身・口・意三業とも、その体は思だと申します。そして意志による身心の活動を「業」と申します。目をぱちくりするのも業と言えますが、仏教では特に習慣的意志活動となつたものを業と申します。ややもすると、その心しか起こらないというふうになつた状態を申します。そういうふうな業を作つて、その業がだんだんと熟していく。そうなる私共の心の働きと、そういうものをその業が束縛するに至る。そして鬼のような地獄の心・餓鬼のような心・畜生のような心をだんだんと作ると、その業が原因となつて、それ相応の地獄・餓鬼・畜生の世界に墮ちる業果を生ずる。

こういうふうな業が原因となつて（業因）、そして地獄格とか餓鬼格とか畜生格となる。それが今生における業果である。死ねばその世界に生まれる。だから因果応報であります。地獄・餓鬼・畜生こういう所に墮ちますと、お念仏をしようと思つてもできないのでございます。こうあらしめられる訳です。もう一回つづめて言えば、業はむくい・果報を生ず

る原因となるから業因、業による報いは業果ですが、又業報という。因果応報の道理であります。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上そういういずれかの業を作ると、私共は必ずそういう人格を形成して、死ねばその世界に生まれ変わるということ免れ難い。こういう訳でございます。

それでこれは悪いことをしたから、人が人を審判するように如来様が直接的にお手を以て、私共を成敗なさるということではない。因果の理法が働いておつて、そして私共が人間として生まれると皆意志の自由を持つている。人間は皆自由意志というものを持つてゐる。そうであるのに、私共はなかなか善い行いをしようとはしない。環境・事情の如何によつて悪いことをするとその業によつて縛られる。このようにして業因をしつかり作る。したがつてこれは決定説とは違つ。この人は神や仏に救われる人、この人は神や仏に救われない人だと、ちゃんと決まつているという決定説とはちがうのでございます。

「我は free will theory だ」とお釈迦様は仰言いました。こういう言葉は、西洋の学者がお釈迦様の言葉を英語で言つたのです。私は自由意志論者だと、お釈迦様は仰言つた訳です。けれど業に束縛されているというのでございますね。業が自由意志を縛つてゐる

のであります。人によってその広狭深淺の差違がありますが。

ところが三塗勤苦の苦しい処に居りながら、如来様のお光明を拜む。お念仏はできないんでございますが、御回向ということによつて、如来様はその者はどこに居るかということとは御存知だから、お光明を以てお照らし下さる。すると火塗・刀塗・血塗に堕ちている衆生は、そのお光明を拜むと苦しみが止まる。そこでその三つの世界に生き長らえている寿命が終わつたならば、そこから生まれ変わつて人間界の身となりお念仏できるようになり、やがて救われるようになる。そこを「皆休息を得て亦苦惱なく寿終の後皆解脱を蒙らむ」とお釈迦様おっしゃったわけです。

弁榮聖者は「御回向するとその御回向の功德によつて、三惡道というこの宇宙世界の監獄にいる方々の苦しみが止められるから、御回向は差し入れみたいなものだ」とおっしゃいました。それで「今の仏教は差し入れ仏教だ。三惡道に堕ちない人を作るといふ処に本来の仏教の目的がある」という意味のことをおっしゃったんでございますね。私共には五感という働きの他に、理性という心の働きがあります。そういうものを持つて居るのが、人間である。動物が進化してやがて人類に到達した。どういふふうにして人類に到達した

かという、感覚と理性を持つている人間を見るのに、二通りの見方がある。それは今申しませんが、とにかく私共は感覚と理性を持つている。そして感覚ではこの人間界のいろいろな事々物々を見ます。理性で以て、それを規定している自然律・自然因果の法則を私共は発見します。例えば水ができるには、酸素と水素とどういふ割合かで混合して、それに熱を加えると化合という現象がおこつて、H₂Oの水ができる。こういう自然因果律を私共理性で発見します。

ところがこの世の中に非常に進んだ聖人といわれる人が出られる。そして私共の心を取り締まっているところの因果律、即ち善悪因果律。つまり道徳因果律ですね。それに気がついて、聖人達はいろいろなことを言っているのです。ごさいます。

中国で共産党が天下を取つて、孔子(前551〜479)や孟子(前372〜289)の教えは封建道徳であるといつて、孔子廟を破壊したりしました。現在はそれがまた復活し出したりしていますが、孔孟の思想は人間の善悪という処を以てしたわけです。そこにどういふ因果律を見たかは、儒教を研究すれば分かるのでごさいますがまた復活し出してきています。朝鮮でございまして、儒教が残っているという点では日本以上でございまして。

こういうのは私共の心というものの上においてものを見ていく訳です。

「昭々として暗からず。了々として常に知る」と古人は言っているが、良心という言葉は性善説を唱えた孟子の著述に由来する。しかし私共の良心は因縁因果に規定されている故にこれを正しく育て、判断を誤らないようにしないとけません。断じて良心即仏性ではありません。基本的人権を肉我（小我）に置いてはいけません。理我・理性我（中我）に置かないといけません。勿論靈我（大我）に置くことが理想で、仏教や光明主義はこれを目指しております。この自我の三階は弁榮聖者が仰言いました。岡潔先生は大変感じ入っていられました。これが欧米の悪い思想を防ぐ基本的な道であります。アメリカで若い人たちの統計を取りました。親と一緒に住むのはイヤだと、息子も娘もそういう回答が多かったのです。

光明主義で言えば、善悪因果律が私の心を規制しているのである。自然因果律は自然科学が明らかにする。しかし善悪因果律は実践理性のかかわりのある倫理・道徳が明らかにするものです。けれど肉の心に依存した理性では疑う心は絶し切れず、判断を誤らぬように努力しなければなりません。現在仏教を研究して博士になったというお方は、大抵感覺

及び理性によつて、特に理論理性によつて仏教を研究しているわけでございます。お釈迦様がお亡くなりになつて後いつ頃の時代に經典が編纂されたかとか、インドに現れた宗教が古来からどういうことを言っていたかとか、今申しました因果律が仏教の經典に現れたのはいつかとか。古来からパラモン教などで言つてきたことがお釈迦様の純粹な仏教に混入して、そういう説が仏教の經典に現れたのはいつかとかいう研究を、皆やっているのでございますね。

特に西洋においてはそういうことが盛んでございまして、そのためそういう主張が明治維新以後、日本に他の文物と共に滔々として入つてきました。それで笹本上人様がよく言つておられました。「禪の方でも念仏門の方でも文学博士になつた方は、ほとんどそういう研究によつてなつたのだ」と。そういうわけでございまして。

日本でそういう研究方法に一番に賛成したのは、禪のぬかりや忽滑谷快天博士です。「お釈迦様は無我を仰言つたのである。我わがなんかないんだと。私共が死んだら六道輪廻するなんて、ある訳ないじゃないか。皆、足が痛いのに結跏趺坐するけれど、今の進んだ理論を用うれば、禪の悟りなんかいっぺんに開ける」。こつうふうに言いました。

ところがその当時、若狭に大雲老師（原田祖岳禪師）という非常に結構な悟りを開いたお方がいらつしやいました。そのお方が博士に論争を挑みました。「五大信条を説いていなければ、それは仏教でない。あなたの言っていることは、本来の仏教の説と違ふ」と。その五大信条の中に六道輪廻（輪廻転生）が入っていました。すると博士は「アンタ、頭が古いねえ。六道輪廻なんかは仏教以外の教えが混入したものだ」とせせら笑った訳です。

そこで大雲老師は「あなたは博士だ。駒沢大学で教鞭をとっている。駒沢大学は曹洞宗の学校であるが、初めて曹洞宗の禅をお説きになったのは道元禪師である。お釈迦様も道元禪師もちゃんとその事を言及していらつしやるじゃないか。それを認めないというなら、曹洞宗から出たらどうか。あなたは食べるには困らんであろう」というように喧嘩をなされたわけでございます。こういうことが笹本上人様のお話しにございました。

中国の人が六道輪廻を繰り返すものを、翻訳して數取趣（たぐしゆ）という。またこれをサンスクリット語でフトガラ（pudgala・補特伽羅）という。フトガラがあるかないか、我なしと仰言ったのだから、ないのだとこう言う。「フトガラ、フトガラというが、結局これがオレだ」という肉体をもった人のことだ」という訳でございますね。しかし天眼ぐらい開きまして

も、肉眼や理性では見えない六道輪廻する數取趣を認識する。けれど理性や感覚では見えません。今さつき申しました御住職は寒塗に落ちました。後ろから食らい付かれると身を裂かれるばかりの寒さだった。しかしそれは感覚や理性では見えないのです。けれどそれは不滅の靈魂ではありません。生滅のもんです。

仏教を歴史的にみれば根本仏教、原始仏教、部派仏教と、その時代になるとたくさんの派に分かれました。理知・理性というのは疑う性質を除き去ることが出来ないから、必ずそうなるのでございます。笹本上人様が名前を挙げられましたが、禪宗だけでなく念仏する人の中にもそういうことがおこりました。そうそうたる文学博士で、明晰な頭で仏教を研究しまして、論文を発表しています。そして「姿・形をもった妙色相好身の仏なんかない。それは仏教以外の宗教の説の混入だ」と。

また人が死んだならば中有ちゆううとなつて（中陰とも言ふ）、生きている間は七年間で人間は物質的に一変するのを、一週間で変わる。そこでちよつとでもよい所へ生まれ変わるように、お寺さんに速夜たひやに来てもらつて御回向してもらふ。早い人は一週間、遅い人でも七七四十九日で全部生まれ変わる。けれど不時の災難に遭つた者は、何年も何十年も何百年

も、中々生まれ変わることができずにいると仏教でいう。これらは天眼まなこという眼を持つと見える。もちろん慧眼・法眼・仏眼という悟りを以て見れば見える。けれど肉眼では見えません。

それならあとの弟弟子の御住職は先代を見たというが、一体何で見たのか。それは天眼でなくて感応道交によるものです。お二人の間のアーラヤ識の感応によるものです。感応すると天眼開けてなくても見えます。

それは、私共の心は銘々別々であります。私共の心のどん底には互いに持ちつ持たれつして共同活動する心があります。仏教ではこれを梵語でアーラヤ（音写して阿頼耶）識と言っています。私共の心は波のような心ですが、そのどん底には海の暗流のようなものが昔からあります。それが阿頼耶識で共同活動していますから、それ故感応することがあります。

浄土宗の前の管長さんは藤井実応という方でしたが、学生時代に光明会のお念仏によくいらつしやいまして、唐沢山別時では大木を打ったお方です。ところがお師匠様は弁榮聖者を非常に崇拜しておられましたので、聖者が近くのお寺に来られると「わしが行く。お

前は留守番をしておれ」といって、とうとう聖者が生きておられる間、お目にかかることができなかったと言っておられます。ある時田中木又先生のお宅でお念仏会がありました。そこに東京光明会の竹内喜太郎さんの奥さんも御参加でございました。御主人は弁栄聖者にお会いしてよくお念仏をしていました。奥さんは天眼を開いていましたが、御主人がお念仏をするものだから自分もお念仏をする身となりました。天眼を開いていても奥さんは観音信仰をしていました。

奥さんが目を開いていると、「ナムアマミダブナムアマミダブ」と皆お念仏をしているけれど、目をつむるとお念仏をしているのは一人だけで、他の人はお念仏をしていません。妄念・妄想を起こしている。ところがある学生さんは「タイヘンだタイヘンだ」と言っている。しかし目を開くとお念仏をしている。

そこでお念仏が終わりまして「あなた、今のお念仏は口先だけでなかったのですか。如来様をお慕いしてお念仏をしてなかったんじゃないやありませんか」と言いました。するとその学生さんはびつくりして「いかにもそうです。奥さんにどうしてそれが分かるのですか。実は大正大学（当時は宗教大学と言ったのですが）の寄宿舎の門限が、夜九時なのです。

ところが田中先生は中々お念仏をやめられないので、門限に遅れると大変だと思つて心で大変だ大変だと言つていました」と申されました。それを奥さんは心で言つているのが聞こえたわけです。

「笹本上人様の御説法にこうありますが、その学生さんとは私のことだ」と藤井実応上人は管長さんになつてから、私に言われました。偉い人になると若い時のそんなことは言わないのですが、非常に真面目な人格者であられましたのでそう仰言いました。だからお念仏は聖名みなをお呼び申すにつけて、生きた親様を一心にお念じするということが大切でございます。

またその博士は「お念仏をしている者には中陰はない。だから初七日、二七日ふた、三七日みというのは、お釈迦様が悟りを開かれて一週間目・二週間目・三週間目にどんなことをなさつたのかということも思つて、お念仏をすればよい。中陰なんかはないんだ」とこう言つておられたのでございます。その方は頭脳明晰でございました。学校で新しい学年が始まる、先生は学生名簿で出欠の名前を呼ぶ。いっぺん呼んだらそれでよい、翌日は宙でおつしやる、見る必要はない。こういうお方でございました。阿弥陀経・浄土三部経に書いてあ

るような極楽なんかないんだ。この世の中は科学が発達してきて、分からなかったことも一杯分かるようになってきた。ラジオその他で知ることもできる。これが極楽だ。ところうふうに言っておられました。私共の感覚と理性で掴み得るものしかない、六道輪廻もお姿をもった如来様も無いのだというのでございますね。

善導大師が、「人間惣々そうそうとして衆務を営んで、年命の日夜に去ることを覺らず、燈の風中に滅めなんことを期し難きが如し、忙々たる六道定趣無し、未だ解脱して苦海を出ずることを得ず、云何んが安然として驚懼せざる、各々聞け強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ」とこう言っておられます。弁榮聖者も「すやかな身のほどにこそもとめかしときはにほふ花の御国を」と詠よっていらつしやいます。涅槃があるということは、前回のお集まりの時間にお話しましたので、復説いたしません。早くこれを得たいものであります。

日本で死んだ人の魂はお盆になると戻ってくる、何がなしに信じています。これを祖先崇拜と申します。日本のみならず東洋民族の美点といえは美点でしょう。外国に行きますと、先祖代々のお位牌なんかありません。親の写真をお祀りしてはいますが、孫・曾孫の代を過ぎると片付けてしまっていることが多い。処がこれを仏教の教えによって生かし、

事實はどうかということを明確にするということが大切である。ただ御回向するとううだ
けではなくて、自分の檀信徒に仏教の眞理事實に目を開いて頂くように、努力するという
ことが御住職の責任だと思ひます

仏教では変わらぬ在り通しの所を性しよという。そして変わりに変わる所を相という。私共
は本来在り通しの大我であるが、それを自覚しません。気が付いているのは変わりに変わ
る差別の方面、小我の方に気がついている。だから死ぬのが嫌なのであります。出来ては
無くなり、無くなつては出来る差別の方(波)だけに気がついています。しかしどのよう
な千波万波の波が起こつても、それは水ならざるはありません。その不変平等の水に気が
つきません。大我の水に吹きつける風は煩惱と業。

それで天台の慧澄えいじやう和上は「法性無漏の大海には、不変隨縁の波の立たぬ日ぞなき」と言
つておられます。変わらぬ在り通しの我、それは法身大我だ。そうなるためには、如来様
の清浄光と智慧光を頂いて慧眼が開かれなさいといけない。すると変わらぬ在り通しを認識
する。処が不変を水に譬えると、そこに煩惱業の風が吹いて、その縁に随つて種々様々な
波が起こる。大きな波もあれば小さな波もある。山のような波も起こる。船が覆されると

いうこともある。けれど山のような波であつても、そこに大きな波があると言おうとする
と、消えて無くなる。

冬になりますと東京や横浜から、たくさん新潟県に行く人がある。風が吹きまして、物
凄く高い波が起こる。それを見に行くのであります。けれどそこに高波があると言おうと
すると、消えて無くなります。ところが船をも覆す大波であつても、その波は依然として
水だ。男波・女波、大波・小波、どのように風が吹いて起こるといへど依然として水だ、
という点をとらえて不変に譬える。不変真如という。いくらたつても変わらぬ在り通しの
水だ。ところがそこにいろいろな縁の風が吹くと、それに随つて大波・小波が起こる。そ
れは随縁真如だと『起信論』では言っている。そこに波は起こるけれど、波は消えて無く
なる。けれど水という点から言えば、千波万波起こるといへど、水ならざるはない。

こういうことを慧澄和上は「法性無漏の大海には、不変随縁の波の立たぬ日ぞなき」と
仰言つた訳です。法性とは万象の本体の法身である。法身は煩惱を持っていない。私共は
体に付いた六つ、あるいは一つ一つ数えて九つの門から煩惱を漏らす。だから私共は有漏だ。
天眼は有漏の三昧である。千波万波の波そのまま尽くして変わらぬ在り通しだ。變つて變

わらぬ。大宇宙はかくの如く、一切尽くして中道、畢竟中道であるといふのであります。

お念仏をしてお光明を頂きますと、私共は本当に変わらぬ在り通しのものを如来様から頂きます。それを弁榮聖者は最幸福と仰言いました。この世の幸福は消えてなくなる。死ぬといえども消えてなくなるものを、如来様が私共にくださる訳です。「永遠の光りにすむ人はみないとさいわひの旅路なりけり」と御道詠にもございます。

今日のもつと外のお話しをしようと思つてまいりましたが、このようなお話しになりました。大雲老師が言われた五大信条とは何と何であるかとは、笹本上人様は全部をおつしやつていられますが、二つ申しましたので、後三つございますね。まず本具仏性です。

礼拝儀の九三頁に「釈尊の本懐」のお歌に、聖者は言つておられます。「分子ぶんれし本具佛性を 開きて清きに悟らしめ」と。その本具仏性が第三番目の信条です。第四信条はその本具仏性がありながら、私共はそれを心の中に持つたままだ。それで業ばかり作つている。「仏とはたがむすびけむ白糸のしずのおだまきくり返し見よ」で、業ばかり作つている。

そこで如来様のことを、業をほどく。だから「ほとけ」と。如来様はお光明を以て、善悪因果の業の綱目をほどいて下さいます。それは宗教因果律でほどく。光明主義の表現で言

えば心霊因果律ですね。それによつて本具仏性が現れてくる。このようにして私共は成仏に向かつて進んで行く。今現在私共修行しているが、これは成仏へのプロセスだ。

かくの如くして、ついに終局目的に到達する、そういうお方が次から次へとある。このようにして諸々の仏を仏教で説く。諸仏實在。これが第五番目の信条である。こういうふうに大雲老師はお説きになりました。中々すばらしいお方ですね。笹本上人様は大変推轂すいぱくしておられました。そして老師は東京に毎月伝道においでになりました。

今の仏教では居士や大姉号下さい、院号下さいと言つと、お金を出しさえすればくれるというのが実情ですが、本当はある程度眞実門を透過しないと、それは貰えないのが基本です。

大雲老師の指導をうけて、あるご婦人が一生懸命修行をしていました。その上、仏教の基礎学も十分やり、坐禪の方も室内の調べも済まされた大姉であります。この方が、「老師様、宝慶ほうきやう記は本当に道元様のお書きになつたものですか」とある時間聞きました。翌月も聞きました。また翌々月も聞きました。そのお方は大小乗の基礎の經典を読んで、その要かなの処をちゃんと会得しているというすばらしいお方でありました。そうであるのにそんな

ことを繰り返し聞く。

そこで大雲老師が「あなたいつも同じことばかり質問しますね。なぜですか」と。そうすると宝慶記を出して来られて、「これに因果は必ず感ずべきや、こう道元様がお師匠様の如浄禪師に質問しておられます。お釈迦様以後五十代目と言われる如浄禪師に聞いておられますが、これは初心の者の聞くことです。宝慶記に載っていますが、道元様ともある方が本当に聞かれたのですか」と。

すると老師は「それをお聞きになったことこそが、道元様の真に仰言ったことの証拠である。なぜならば今申した、因果必ず感ずべきや、とこういうようなことを了々として知るは、これ仏の境界であるからである。三明六通円かに開いた仏の境界である。悟りの眼が完全になるまでは、ぼんやりしている。はつきりしない。その僅かな疑いをも残らずお師匠様にお訊ねになる。そこが道元禪師の着実な御修行ぶりで、他の人には真似のできなところ。それでこそ道元様の仰言ったことに相違ない」と大雲老師は判定を下されました。

従って「因果の道理は孔子老子等のあきらめる処に非ず。ただ仏々祖々あきらめ伝えま

します処なり」とは、道元様が確信を以て断言なさるところであります。このように過去・現在・未来の三世通達の眼を開かないというところ、因果応報を明瞭に見通すということではきかないのでございます。まして況や私共は感覺と理性という肉眼の分際においては、そういうことはとても分らない訳であります。

そのためには慧眼開かざるべからず、法眼開かざるべからず、かくして仏眼を開けば、大宇宙の真相を事実通り認識することができます。専ら肉眼に依存する限り、大宇宙の真相はいつ迄たつても如実に認識することはできません。いかばかり科学や哲学が発達しても、仮定仮説を脱することはできません。これについては又他日を期したく存じます。弁榮聖者は自力聖道門を理性宗とおっしゃられ、他力浄土門を感性宗とおっしゃいました。その理性宗と感性宗の理感二性を統一総合した円具教光明主義とその成仏への中心道を切り開いて下さった訳であります。

(同称十念)